

5-2 西郷村の民話 (「福島県の方言」より)

にしごう ば
西郷の婆っばの話 (西白河郡西郷地方)

- (1) 蛇の婿入り
- (2) 炭焼吉次
- (3) 長坂小僧
- (4) 塩吹き白
- (5) 食わず女房
- (6) 花咲翁さん
- (7) まりつき唄
- (8) 小豆の化け蟲
- (9) 蛙の恩がえし

(1) 蛇の婿入り

一人娘があって、奥の座敷さ寝で、そこさ男なって毎晩通って来んだって、蛇が。蛇とわかんねでいたんだって、その娘がな、それから変だなと思って、その家の裏に竹藪があんだって、その竹藪の方から来んだってない。男ひとりして奇体がおかしいな。ハア子供が出来んだってゆうだナ、子供が出来んのに、ちっと様子見ておかねど困っから見でくれべど思って、それからずーと足跡つけてったづうだ。「人間のどこなんか、やたらに通うもんでねえぞ」って。「人間っておかねものなんだからナ。針一本刺さったら大変なんだから、行ってなんねぞ」って。

それから夜待ってたんだってない。そしたら、そのうちスルスルと戸開けで入って来たんだって。また、寝たってゆうたナ。そのあど針で刺してやったって、そしたら呻きながら行ったんだない。まだあど追ってた。「なんだやらっち来たな」って、「やらっち来た」つた。「人間なんて、なんぼ通ったって駄目なんだから、子供なんてなんぼ孕ませだって、五月節供の蓬と菖蒲の湯たって入れば、ひとりで、子供なんておりにしもうだ。なんぼ通ったって駄目だぞ。蛇の子なんて生まねだから」「あゝ、これはいい事聞いた」と思って、早速ハア屋根さつつあした奴を取って湯にたって入ったんだって、そしたら、子供がおりちゃったって、「俺が腹、痛から、とめでくいよ。樽ひとつくちゃくんせい」って樽中さゴダゴダって、うんと産んだって。ざっと昔栄えだ。

(2) 炭焼吉次

むかし京都の殿様に娘があって、幾つになっても嫁に行かなかったんだと。そしたらある晩ナ、夢見たんだと。その夫にな、仙台のはなっぱたに炭焼している人あんだってナ。その人ほか自分の夫になる人はねえって夢見たんだってナ、そんで訪ねてみっぺというわけでナ、そして仙台さ来たんだってナ。尋ねてみたんだってない。知っている人いて、炭焼きしている若い人を訪ねて行ったんだってない。訪ねて行ったら夜になったから「今晚泊めでけろ」ってない。泊まったら、いや降るは降るは三日も三晩も雨降って、その家に泊まっちゃったんだどない。そしてだんだん話してナそして訪ねて来たちゅわけなんだ。そんで、「今夜だけでいい」「そのかあり米も何もねんだから」って、粟で粥煮てない。そして御馳走になったんだと。そして小判いっぱい持ってっからない。「これさえ持ってけばなんでも自分の好きな